野良犬達の晩鐘　第三部

愛弟子を救った二頭の犬

京都大学の研究所から一年振りに札幌に戻った私を新たに五人の学生が待ち受けていた。男子四人に女子一人。その中の一人の男子学生は、わざわざ九州の果てから北海道にきたという。

その理由を本人に聞くと、

「第一にこの大学の中で歴史と伝統のあるK寮に入りたかったこと。第二にこの大学の部活でヒグマ研究会に入りたかったからです。」

と明快な答えが戻ってくる。

確かに、この大学のK寮には全国的に人気があり、K寮に入りたいという理由だけで受験したという学生もないではない。それと同時に、通称クマ研と呼ばれるヒグマ研究会もまた、一部の受験生や高校生に人気があるという話も聞いている。

そこで私は質問を加えた。

「ところで君、君は私の下で何を研究したいんだい？」

「はい、出来ればヒグマの研究をさせて下さい。」

それがこの学生が口にした言葉だった。しかし、私は首を捻った。何故なら、動物の行動をじかに観察して、その動物固有の行動様式や社会生活を明らかにしようとする私の研究室で、あの恐ろしいヒグマが研究対象に成り得るかどうかと考えると、答えは自ずから否定的なものにしか見えなかったのである。

それでも、まだ若い学生の期待や意向は尊重しなければならない。だから、最初の話として、ともかくその言葉を受け入れておくことにした。

他四人の学生はその日から足繁く私の研究室に通い始めた。動物一般に関する知識こそ最初は欠けていたが、その真面目な姿には私も感心していた。

ところが、どこか含みのありそうなクマ研所属の学生はそれから半年余り私の前に姿を現さない。そこである学生に聞くと、

「あいつはクマ研のマネージャーで忙しいんじゃないですか。それにK寮に居座って応援団の幹部も続けているようですよ。」

という返事が戻ってくる。

（まあ、卒業を一、二年延ばす学生も少なくないから、それもいいか。）

と私も考え、その学生H君のことをしばらく忘れることにした。

それから三年、二月初めのころだったろうか。突然、H君が私の研究室に現れ、目をぎらぎら輝かせながら、一通の封書を差し出してくる。

「これは何だい、君？」

私が思わず聞くと、

「開いて見てもらえば分かります。」

とひどく傲慢な言葉が戻ってくる。仕方なく、私はその封書を開いてみた。一枚の簡単な文書が顔を覗かせ、その最初の部分に、退学願い、という文字が浮き出ている。

それを見て、私は咄嗟に緊張した。

（すでにこの大学に入って六年も経つのに、今更退学とは何事、・・・・・？）

という疑問と、目の前にいる相手の全身から湧き出る不穏な雰囲気とが、私の緊張を誘ったのである。

とはいえ、私は黙ってその退学届けにもう一度目を向け、じっくり文面を確かめた。その結果、ある重大な事実に目が留まった。それは書名欄にある父親の字体と本人の字体が完全に一致していること。さらには、夫々の署名の後ろ

に押された印鑑もまったく同一のものだ、ということであった。
私はそこで相手の学生を見た。それから、自分が気付いた二つの重要な点について確かめた。
「H君、この部分の署名と捺印が一致している。これは全部、君自身で作り上げたものだろう。だとしたら、この書面の最後にある私の署名は出来ないぞ。」
するとその途端、学生の額に二、三本の縦皺が盛り上がり、顔中真っ赤にして怒鳴り出した。
「先生、それは横暴な話です。幾ら先生といっても、そんなことは許されない話です。」
そこで私も切り返した。
「私の見方が間違っているというなら、早速ここから君のお父さんに電話を掛けよう。そして君のお父さんの口から退学を承諾する、という言葉が返ってきたら、私も黙って署名しよう。それでいいかい、H君・・・・・?」
それはある意味で私の妥協であり、また別の意味では相手に対する脅迫でもあった。
事態がここに至って、学生の反論はもうなかった。しかし、私の研究室を出るとき、彼は棄て台詞を忘れなかった。
「先生、それでは退学届けは引っ込めます。しかし、卒業証書は絶対貰いにきませんから、・・・・・・。」
その日の夕方、私は鹿児島にいるというH君の父親に電話を掛け、今日の顛末を説明しながら、一つだけ質問した。
「本人は絶対卒業証書を受け取らない、と言っていますが、ご両親の考えは如何でしょうか、・・・・・・?」
すると電話の向こうから、きわめて明快な答えが返ってきた。

「いえ、息子がどう言おうと、親としては卒業証書を戴きたいと思います。息子は元々頑固で、一度言い出したら聞かないと思いますが、私達両親が息子に代わって戴く訳にはいきませんか、・・・・・・？」

「いえ、それは構いません。では、こちらでH君の卒業に必要な書類を整え、事務の方へ届けておきます。」

こうして一旦、H君騒動は治まるかに見えた。しかし、それが大きな間違いだった。

まず、彼の卒論内容を調べてみると、中身は白紙に近く、とても審査に通るレベルの話ではない。さらに、彼の卒業に必要な単位を調べると、それも足りない。

（これは困った、・・・・・・？）

私はまず、頭を抱えた。それから、一見不可能に見える目前の事態をどう打開するか、深刻にして真剣考えた。

まず、周囲の先生方の部屋を回り、自分のことなら決して下げたくない頭を下げた。それから事務室に出掛け、窓口の事務官にも頭を下げて回った。そしてどうやら、H君の卒業に必要な条件と書類を整えた。ただ、最後の段階で学部長に言われた。

「これだけ卒業に問題のある学生ですから、皆と一緒の卒業という訳にはいきません。どうですか、ご両親に電話をして、三ヶ月遅れの六月に一人だけの卒業式ということで納得させて下さい。よろしいですね。そのときは間違いなく、ご両親のご出席をお願います。」

こうしてH君に関する難題が一つ終わった。ただ、それはただたんに一つだけの話しにすぎなかった。

一ヶ月後の三月中旬、私達の苦労を他所に、H君が再び私の前に現れた。

「先生、もう一度言いますが、私は卒業証書を受け取りません。それを貰うと、自分自身が情けない、弱い人間になってしまうからです。それから、四月早々、知床の番屋に入り、一年間そこで暮らします。後はまだ決めていませんが、・・・・・・。」

それを聞いて私は尋ねた。

「ところで、知床の番屋で君は何をするんだい、・・・・・・？」

「はい、簡単に言えば無人の番屋を守る番人ということです。」

（しかし、・・・・・・？）

そこで私は考えた。

知床半島は当時でも、大自然の残る日本唯一の野生動物王国と言われていた。特に問題なのは現地の言葉で山親爺、つまり蝦夷ヒグマの密生地ということだった。

考えがそこに至ったとき、私はふと、嫌な予感に囚われた。

（あいつは死場を求めて知床の奥地に入ろうとしている、・・・・・・？）

その考えは一気に断定へと進んだ。一見なさそうな話が、実は間違いのない判断に違いなかった。

（だとしたら、彼の恩師として私に残された手段はないのか、・・・・・・？）

私はまた、新たな視点から考え込んだ。そして、見付けた。

すでに当時、私の北海道犬研究は終わっていた。その結果四、五頭の北海道犬が手元に残り、私が個人的な趣味で日高山脈に登るときなど、よくその内の二、三頭を引き連れて出掛けたものだった。

その一つの目的はヒグマに対する北海道犬の対応性を自分の目で確かめること。二つ目はヒグマの攻撃を受けそうな場合、彼等に助けてもらう、ということだった。しかも実際、そうした機会の中で、北海道犬が実に勇敢で頼もしい

犬だ、ということを実感していた。
明日は札幌を離れて知床に向うという日、私は最後の提案を試みた。
「H君、私の手元にいる北海道犬を二頭渡すから、知床の番屋に連れて行かないか。まあ何もないとは思うが、万一ということもあるだろう。どうだい、・・・・・・?
すると彼は、仕方ないというふて腐れた態度で、私の提案を受け入れ、一台のポンコツカーに二頭の犬を詰め込み、遥か四百キロ先の知床半島に向った。
それから数ヶ月、日々の雑用に追われて、私はH君のことをすっかり忘れてしまった。ところが、大学が夏休みに入った最中、H君の姿が突然私の前に現れた。
「先生、一旦知床から戻ってまいりました。」
「おお、H君じゃないか。元気そうだな・・・・・・!」
「はい、今はとても元気になりました。先生のお陰です。これを見てください。」
「どれ、どれ、・・・・・・。」
目の前に引き伸ばされた写真が一枚。それをH君が謙虚な態度で私に渡す。ふと怪訝な思いに駆られながら、気を取り直して、その写真に目を向ける。
そして私は見た。背中を見せて逃げ出そうとする一頭の小柄なヒグマと、それを懸命に追い掛ける二頭の犬の姿。その色や姿や形を見れば、その二頭が私の手元で育った北海道犬の牡に違いない。
それを見て、私の胸が急に詰まる。声も出せない。ただ、大粒の涙が両頬を伝って流れるばかりだ。
その状態のまま、ふと私は目を上げる。そこに声を殺して泣くH君がいて、涙を一杯に溜めた目で私を見ている。
私はその目線を外す。それから後ろを向き、緑一杯の大学キャンパスを眺め

る。そこに過ぎ去った日々の記憶があり、懐かしさが込み上げる。
これは昭和五七年の夏、最初に私がアラスカオオカミを訪ねて現地に向う二年前の出来事だったと記憶している

アラスカで逢った浮浪犬　その一

昭和六十年前後、私は七年間にわたって毎年アラスカに出掛けた。目的はアラスカオオカミの研究。
ある年は中学生の長男を伴い、またある年は家族七名全員を伴うアラスカ行だったが、今思い返すと、数々の懐かしい記憶が蘇る。
その一つは、我が恋人ともいえるオオカミの群れとの遭遇。出産後一ヵ月半の産室近くに唯独り留まり、そこで毎日のように観察された母と子、夫と妻、それから恐れ気もなく私の足元にやってきた産毛の子供達。それら一つ一つの場面が、今でも生きいきと脳裏に浮かんでくる。
前進基地の一つとなった小さな湖、そこで家族全員揃って暮した二週間の日々。周囲百キロ以内に誰もいない世界。
地上十メートルの樹上に作った展望台。長さ五メートル余りのシーソーと、高さ四メートルのブランコ。近くに生い茂っていた木々をそのまま利用したそれらの遊具で、遊びに興じた五人の子供達。
ヘラジカの大きな角をテントまで誇らしげに持ち帰った幼い子供。帰国直前に走ったアンカレッジマラソン。そのマラソンでは家族の中で一番遅くなった情けない父親の私。
思い出せば出すほど、尽きることのないアラスカの情景と日々。その中に、ベースキャンプで偶然仲よくなった野良犬の話がある。

アラスカオオカミの研究で全面的な支援を戴いた人物が狩猟管理局の調整官を勤めていた。Ｊ．Ｊ．バーンズという彼の提案を受け、私と家族のベースキャンプはアラスカの内陸部、カナダ国境に近いトックという街に決まった。

当時、千人余りが暮すトックは英語ならＴＯＫと書く。そこで現地の人に街の名前の由来を聞くと、多くの人が分からない。それでも二人しかいない現地狩猟管理局のケリーハウスから的確な答えが返ってきた。

「トックのＴＯＫには英語としていうなら、特別な意味はないよ。ただ、この三文字には日本に由来した話があるんだ。」

「本当、君は私を担ぐつもりじゃないの？」

「いや、これは本当の話さ。貴方は日本人だから分かる筈だ。日本でこのＴＯＫから連想される言葉を考えてごらん。」

「ＴＯＫ、僕には分からないなあ、・・・・・・・。」

「つまりさ、ＴＯＫの由来は日本の東京、ＴＯＫＹＯにあるんだ。」

「へー、それは知らなかったなあ、・・・・・・・！」

「ほらこの建物の横を走るアラスカハイウェイー。あれは一九三十年代後半に建設が始まり、四十年代に完成する予定だったんだ。それで当初は日本のＴＯＫＹＯをそのままこの街の名前にすることになっていたのが真珠湾攻撃で狂ってしまい、急遽ＴＯＫに変わったということさ。」

この話を聞いて、私は驚いた。驚き過ぎて、相手のケリーハウスと腹を抱えて笑ったのを覚えている。

そのトックに滞在して三日目、当時小学四年生だった娘が、一頭の大きくて長い茶色の毛をもつ犬を表通りから連れてきた。

「あら、その犬どうしたの？」

妻がまず気付いた。その声に振り向くと、大きな犬が娘の脇にきちんと座っ

ている。

「これは立派なゴールデンの牡じゃないか。どこでどうしたの、・・・・・・？」

私が聞くと、嬉しそうに目を輝かせる娘が言った。

「あの脇道を散歩していたら、この犬が尻尾を振りながらやってきたの。それが嬉しかったから、私は抱いたり撫ぜたりしていたら、こうなっちゃったの。途中で何度もお家に帰りなさいといったんだけれど、付いて来て帰らないの。ねえ、いいでしょ。ここで飼ってても、・・・・・・？」

小学生の娘の無邪気な話はすべてが目に見える。

（しかしなあ、・・・・・？）

私は考える。ところが、妻の方がこちらを向いて私に迫る。

「貴方、もしこの犬がここにいたいのなら、それでいいじゃないの。どうせこんなに小さな街だもの、もし飼主が居れば、すぐ見付かって連れ戻されるわ。」

「それもそうだな。まあいいか、・・・・・・。」

そこで簡単に衆議も一決、我家に新たな仲間が加わる。

不思議なことに、大ちゃんと名付けたその犬は居場所に定められた玄関に陣取り、鎖で繋がれてもいないのに、その場で素直に生活を始める。

食事も家族皆と一緒、娘との散歩も一緒。そして毎晩眠るのも一緒。脇から眺めていると、その姿ずっと前からそこにいる我家の飼犬と変わらない。

同じアラスカでも、内陸部の気温は極端に低い。その結果、遅い春の到来が海岸部と比べてさらに遅くなる。

五月、毎日快晴が続き、近くの山の雪も消える。それを機会に我家はささやかな登山に出掛ける。

アラスカに着いて間もなく、アンカレッジの空港で借りた大型バン。それにまず家族が乗り込み、誘いもしないのに大ちゃんも喜んで乗り込んでくる。

「本当にお前もいく気か？」

私が笑いながら聞くと、返事は明快。

「しかし今日は、散歩でなくて、登山なんだぞ、・・・・・？」

だが、それは最初から無駄な脅し。車は賑やかに目的の山の麓に向う。

空が抜けるように明るい。気温はまだ十度前後、ただ一日の日照時間が十八時間を超えると、アラスカは快適な世界に変わってしまう。

時間にして四五分、車を降り、すぐ登山に取り掛かる。先頭は何故か居候の大ちゃん。大きな身体ながら、山登りのスピードなど、到底人間の追従を許さない。

ところが、私達家族から二、三十メートルも離れると、大ちゃんは急いでこちらに戻ってくる。それから家族皆に愛想を振り撒き、改めてまた山登りを続ける。

私はそこで考えた。

（何故、この犬は私達家族と一緒にいることを選んでしまったのか。飼主はこの小さな街の中にいないのか。大ちゃんの素直さ、明るさを見る限り、真の飼主がこの犬を可愛がって育てたのは疑う余地もない。なのに、・・・・・？）

輝く太陽の光が快適な大気を通して降り掛かる。やがて八合目、振り向くとトック一帯の広大な景色が広がる。

大地を見下ろすと、無数のシュプールが至る所に続いている。すぐにはそれが何を現しているのか分からない。ただ、不思議な模様が国道の脇から深い山奥へと向っているのが気に掛かる。

「パパ！」

長女の大きな声が聞こえる。私はその声に振り向く。するとそこに、何故か一輪の可憐な花が咲いている。

「クロッカスかな、・・・・・・?」

ふと私の頭に、昨年の春、庭に植えた草花の姿が浮かぶ。

「間違いないわ、これクロッカスよ。でも不思議ね、どうしてアラスカの山の中に、こんな花が咲くのかしら、・・・・・・?」

若いときから今日まで、私は花というものにとても疎い。だから、娘の疑問に答える術などありはしない。

それにしても、この登山で常に我家全員の先頭を切りつづけた大ちゃんの不思議な姿に謎が残る。

(おい、大ちゃんよ。一体お前にとって、飼主とは何だね。人間とは、・・・・・?)

私は本気で聞いてみたい。

アラスカの壮大な風景をバックに、家族写真を数枚撮る。その中央に大ちゃんのあの懐かしい姿がある。後日、その写真を見る度に、犬と人間の不思議な歴史や関係に思い巡らす。

アラスカで逢った浮浪犬　その二　ハスキー君

アンカレッジから北東に三百キロ、フェアバンクスから西南西に二百キロ。そして隣接するカナダ国境からなら東に五十キロ程度の場所にＴＯＫの街がある。

この街に着いたとき、正確な人口を知りたいと思い、まず町役場があるかどうか聞いてみると、

「そんなものはここにないよ。」

と笑われ、次に郵便局を訪ねて聞いてみると、

「さあ、こちらではわかりませんね。」

の一言で処理されてしまった。そこで狩猟管理局のケリーハウスに相談する

と、

「多分、看護婦が一人居る診療所で聞くのが一番いいかもしれない。」

という訳で、少々不安だったが診療所を訪ねてみた。

その結果、おおよその数でＴＯＫの街の人口は千二百人余り。ただし、

「来るにせよ去るにせよ、住民の移動は毎年余りにも激しく、正確な人口など知る由もないことです。」

とまた笑われてしまった。

いずれにしても、アメリカ本土から陸路アラスカに入るには必ずこのＴＯＫの街を経由する必要がある。それはまた、アラスカから陸路カナダやアメリカ本土へ戻る場合も、同じことが言える。

ちなみに、この街の国道に立つ交通標識の一つにはアメリカ本土から千二百六十マイルと書かれている。

大ちゃんが飼主の元に戻って間もなく、次女がまたもう一頭別の犬を連れて戻って来た。そこで妻が聞くと、

「だって、表通りを歩いていたらこの犬が向こうからやってきて、親しそうに尻尾を振るの。だから、お前も家に来るかいと聞いたら、すぐ賛成して付いて来ちゃったの。」

という返事だった。そこで妻の近くにいてその話を聞いていた長女が、

「その犬のそばにはきっと飼主もいた筈よ。急いで出合った場所にこの犬を連れて行ってやりなさい。」

と叱った。

次女はその言葉ですぐベソをかいたようだった。ところが、泣きながら長女の指示によって表通りにその犬を戻しに行った次女がまだベースキャンプの家に戻るより早く、その犬は我家の玄関に戻って来てしまったのである。

ベソをかきながら家の玄関口に戻って来た次女。その次女を再び尻尾を振って迎える犬。そのふたりの姿を見たとき、私達家族は大いに笑った。

決して品のいい犬ではなかった。ただ、その犬は現地で最も多く飼われていたアラスカンハスキー犬の中の一頭だった。

次女はその犬に勝手な名前を付け（ハスキー君）、とてもよく可愛がった。とくに一人だけの散歩が好きだった次女は朝でも昼でも、またなかなか日の沈まない夕方でも、このハスキー君を連れ出した。

丁度その頃、私達は毎週ＴＯＫを離れ、前進基地の一つに出掛けた。ただ、食料と飲み水の補給があるので、五日から一週間後には否応無く、ＴＯＫに戻る必要があった。

そんなことを二度、三度と繰り返すうちに、ハスキー君は再び我家からどこかへいなくなった。

次女は悲しんだ。ベースキャンプ地からＴＯＫの街に戻る度に、次女は独りで街中を歩き回った。そんなある日、次女が息を切らしながら散歩から走って戻って来た。

「あのね、ハスキー君見付かった、・・・・・・！」

「何処で、・・・・・？」

「表通りに観光土産屋さんがあるでしょ。あの店の裏側で犬橇のチームが待機していて、お客さんを乗せて走るんだって。そこでちょっと覗いたら、あのハスキー君が他の犬に混じって居るのよ。びっくりしちゃった。」

「それでどうしたのよ？」

「それで私が名前を呼んだら、こっちをちょっと振り向いて尻尾を振ったわ。だけど失礼なヤツよ、アイツは。あんたなんかもう関係ないって感じだもの。」

「いいじゃないの、飼主が見付かったんだから。」

そんな次女と長女の無邪気なやり取りを聞きながら、私は改めて考えた。
（犬とは何者か、人間とは何者か。犬という利口な生き物にとって、何故これほど身勝手な人間が必要なのか？）
その答えは、永遠の謎として私の心に残っている。

アラスカで逢った浮浪犬　インデアンの流儀

私達がアラスカでベースキャンプ地にしていたＴＯＫの街の北側にアラスカ第二の大河タナナが流れている。このタナナ川の原料はカナダとの国境に沿って走る山脈地帯を源流とし、遠く北西に向って進んだ後アラスカ第二の都市フェアバンクスの脇を流れ、最後にベーリング海に出る。
そのタナナ川に沿って、アサバスカンインディアンの小集落は互いに遠く離れた場所に散在する。ただ、集落と集落の距離が余りにも大きいので、彼等の交流手段はタナナ川を利用した冬期間の犬橇に頼る歴史が、ごく最近までつづいていたという。
調べてみると、ＴＯＫから西十五キロのところにタナクロスという地名があり、そこにまずアサバスカンの集落があった。更に、ＴＯＫの南六十キロにもう一つ大きな集落があって、それぞれに九年生の初等学校が設けられていた。
ＴＯＫでの生活が長引き、少しでも時間に余裕ができると、私はその二つの集落を何度も訪ねた。
まず、近い方の集落を訪ねた際には、学校の校長と親しくなり、子供達とくに中学一年程度の男の子とも深い付き合いを始めるようになった。あるときはその子が十五キロの道を歩いてＴＯＫ市街の我家を訪れて来たり、私もアサバスカンの集落にある彼の家なるものを訪ねたりした。

タナクロスより三倍以上も遠いアサバスカンの集落でも、一人の男性教師と出合った。外見からすると、年齢は三十代の半ばだったろうか。少々生気の失せた感じのする男だったような気がする。

それでも打ち解けて話してみると、彼は気さくな人物でアサバスカン独特の風俗や習慣について面白い話を次々にしてくれた。しかも、彼の話を裏付ける事態に直面するのにも時間は掛からなかった。

ある朝、私は車でその集落の入口に辿り着いた。すると目の前にある一軒の家から男女二人の大人と、子供が二人出てきた。そこで子供の一人をつかまえ、笑い話に紛れて色々な質問をしてみた。

「君、あの二人の大人の人は君の両親かい？」

「いや、違うよ。」

「じゃ、君と一緒にあの家から出てきた子供は君の兄弟？」

「いや、違うよ。」

「でも昨日は皆一緒にあの家で寝たんだろう。」

「そうだよ。」

「じゃ、君の両親や兄弟はどうしているの？」

「父さんは二年前にここから二百キロ離れた別の集落に出掛けたままだよ。それに母さんのことは僕分からない。兄弟は多分この集落の中にいる筈だけど、一緒に暮している訳じゃないよ。」

こうしてその子と私の会話は軽快に進んだ。ただ、その子の話す内容を考えたとき、私はまったく異次元の世界に誘われている自分に戸惑った。

「ところで君、今日は学校がある筈だけど、何故皆学校に集まらないの？」

「うん、二日前にある叔父さんがムース狩りから大きな獲物を持ち帰って来たんだ。だから、その日からずっと集落の皆でその肉を食べ続け、全部食べ終

わるまで学校には行かないんだ。」

その言葉を聞き、私は改めて学校に泊り込んでいる教師を訪ねて、訊ねてみた。

「そうなんですよ。それがアサバスカンの流儀というか習慣というか、実に教師の私にとってはやっかいな話です。でもここはアサバスカンの村ですから、こちらのルールを押し付けることもできません。」

その答えを聞きながら、私は最後に一番興味のある質問を教師にぶつけてみた。

「ここには余り橇犬の姿が見えませんが、どこか他の場所で飼っているのですか？」

すると、薄ら笑いを顔に浮かべた教師がそっと教えてくれた。

「実はね、この冬の終わりに生肉が欠乏したとき、誰かが喰ってしまったようです。冬休み中のことで、事実の確認はしていませんがね。でも、アサバスカンと犬の関係を知りたければタナクロスの集落がいいですよ。あそこは犬橇を使って移動する習慣がしっかり残っていますから、・・・・・・。」

その言葉を聞き、私はその日の午後、あたふたとタナクロスに引き返した。それから例の子供を探し出し、集落の中に飼われている犬達をすべて見せてもらった。その間、近付く家の前や中に居る大人達からいやな目で睨まれ、そのアルコール中毒に冒された姿に、不快さと哀れさを感じた記憶が今に残る。

ともかく、タナクロスの集落には十頭前後の大型の犬は居た。ただし、純系と思しき犬の姿はなく、冬になって橇犬を多様に使うとすれば、その絶対数に問題が残った。そこで私はその子に聞いてみた。そして、すべてが分かった。

「この冬にねえ、ここを犬橇で通った人に頼まれて自分の犬を売った人が多いんだ。多分、その金は全部、ＴＯＫの酒屋に消えたけどね。それにきっと叔

父さんがびっくりすることがあるよ。さあ、こっちに来て。」
そう言うと同時に、その子は走り出した。行き先は近くのタナナ川の畔。そこで彼はこちらを振り返り、微妙な笑顔を浮かべながらすぐ下の雪解け水が流れる浅瀬を指差した。
そこを見た途端、私はあっと声を出し掛けた。それから自分の心に渦巻く動揺を抑えて、最後の質問を試みた。
「これどうしたの？」
「実はね、犬橇の人に一旦売った犬が三頭後でここに戻って来てしまったんだ。そうしたら集落の人が怒って、すぐライフルで撃ち殺してしまったのさ。叔父さんびっくりした？」
「・・・・・・・・・・・・！」
あれから四半世紀、私はその日に目撃した川底の犬の姿を鮮明に思い出す。しかし、そこに生きるアサバスカンの大人の行為を、どう受け止めるべきか答えはない。残念なことだが、・・・・・。

極東ロシアの街角で　その一　バザールにて

私は旧ソ連時代のロシアを知らない。またヨーロッパに隣接するモスクワやレニングラードも未だに知らない。ただ、唯一知っているのはペレストロイカ直後に出掛けた極東ロシアの一角、カムチャッカ州の州都サンクトペテルスブルクとその周辺海域に浮かぶ小さな島々。
一九九四年五月中旬、相手国からの誘いを受け、札幌から新潟、新潟からハバロフスクを回って、カムチャッカに辿り着く。着いた所はペテルスブルク市の郊外にある国際空港。その空港は当時、木製の荷台を載せた古すぎるほど古

いトラックがぽつねんと走る、そんな寂しい世界だった。

嬉しいことに、その空港では大勢の人が私を待ち受けていた。一人は一面識もない日本人の学生、その他は現地ロシア人の研究者とその家族。

私の目的は唯一つ。そのペテルスブルクの街で打ち合わせを済ませた後、カムチャッカ半島の中央部から東三百キロの海上に浮かぶ小さな島で、トド（アシカの仲間）の生態と社会を研究することだった。

私はまず、現地ロシア人の責任者ウラジミール・ブルカノフと会い、彼とその奥さんバーニャからとても素晴らしい歓迎を受けた。

次に私はブルカノフの紹介で、きわめて小さな島メドニーに同行するという大男のウラジミール・ベルジャンキンに会い、現地調査に関連する具体的な打ち合わせを済ませた。

かくして、出発の準備は整った。ところが、そこから先に不安が募った。

まず最初の問題は、いつ何処から何処へ何でいくのか、はっきりしないことだった。そこで私は二人に何度か問い合わせた。すると現地に同行する予定のベルジャンキンの方は、すべてブルカノフに聞いてくれという。そこで直接ブルカノフに聞くと、多分二、三日以内には行けるだろうという返事が毎回返ってくる。

出発の日時がどうして決まらないのか。また、どんな条件が揃うと出発出来るのか。相手に聞いても的確な返事は戻って来ない。

それでも最初の一週間は与えられたアパートの小さな一室で待ちつづけた。しかしそれが二週間目に入ると、私は頭を切り替え、積極的にペテルスブルクの街に出掛けた。市内全域に散在するバザール（路上市場）を見て回ることに興味を感じていたからである。

ところが、それを始めてすぐ、私はあることに驚いた。朝の夜明け前からバ

ザールには多くの人が集まる。その人ごみをわけて仕事場に通う男と女の姿もあるが、圧倒的に多いのは素性不明の人間と大型の犬達。中でも私は、バザールの近辺を人の流れに紛れてさ迷う野良犬達の姿に目が向けた。

朝の六時、デジタルカメラを胸に下げ、小型のバッグを背負って街に出る。そこは深い霧か靄が立ち込め、すべてのものがぼんやりしている。

一番近いバザールはアパートから歩いて三分。幹線道路の脇に広がるそのバザールに取り合えず足を踏み込む。いささか胸に浮かぶ不安の影。それを押し殺しながら辺りを眺める。

足元に散乱するガラス瓶の欠片。荷物を運び込んだときに使ったと思われる汚れた無数のダンボール。それに何故か、石炭の灰まで辺り構わず地面を覆う。その惨憺たる姿のバザールの中を、数匹の大型犬が縫うように動き回る。

体格、体型、毛の色などを考え合わせると、夫々がヨーロッパに起源をもつ中型犬から大型犬の純粋種に近いことが分かる。ただし、その痩せ細った身体と、汚れ切った姿を見る限り、彼等に頼れる飼主がいないのがよく分かる。

一瞥すると、イギリス原産のセッターが断然多いが、ドイツ系のシェパードの姿も少なくない。ただ、どの犬も歩きながら下を向き、何かを求めてさ迷い歩く。

辺りを改めて見直す。まず目に付くのは建物の陰に堆く積まれた泥混じりの固まった残雪。そこには不用になったすべての物が含まれる。

次に冬の間まったく掃除のされてなかった路面のひどさが目に留まる。近くの残雪の山から流れ出した汚い水。それが夜間の寒さで凍り着いた路面。凸凹破損の激しい道路。そのすべてから湧き上がってくるような臭気。それでも早朝のバザールには無数の野良犬が集まる。

彼等は決して目線を上げない。それは行き交う人間の顔を決して見ないとい

うことに通ずるようだ。

仮に、彼等のような野良犬の目が間違って人間の目と交差することがあれば、野良犬は脅え、その怯えが目線の合った相手の人間から攻撃を受けるという危険性が考えられる。それは多分、野良犬とロシアの人間だけの話ではない。

私の動物観察によれば、人間と動物の間で目線を合わせることはまず、双方に緊張をもたらす。その理由など科学的に分かる筈もないが、そこで生まれた双方の緊張から、多くの事件が起こるという話は、日本国内でも少なくない。端的にいうなら、山奥で出合った人間とクマの間で起こる悲惨な事件。それがまさに、この話を裏付ける。

それにしても、ペレストロイカの混乱がつづいた直後の九四年とか五年当時のロシアは貧しすぎた。日本の過去に例を取れば、太平洋戦争直後の昭和二二年から二四年当時の情景が念頭に浮かぶ。

それにしても、私がバザールで見たあの野良犬達は一体何を餌に生きてきたのか。必要量の何パーセントの餌を毎日手に入れられたのか。それを思うと、今更ながら心が痛む。

ちなみに、太平洋戦争の末期から敗戦直後に掛けて、日本国内では多くの野良犬が人間に食べられた、という話を聞く。ならば何故、あの無数にいたロシアの野良犬達は食べられずに済んでいたのか。

日本に戻って写真を見るとき、私は何度もそのことを考えた。そして、一つの答えに達した。

あれは人間と犬にまとわる歴史の違い。長い歴史の中で、主に水田耕作に依存して生きてきた日本人には犬から貢献を受けた経験がなく。反面、牧畜や遊牧生活にいそしんできたヨーロッパ人には犬という生き物に対する

特別な価値観がしっかりと根付いているに違いない。

私はこの自分で考えた推論を今更確かめる手段を持たない。かといって、それではお前の推論を棄てるかと聞かれれば、私は明快にノーと答える。

極東ロシアの街の片隅を歩いていた、肋骨の浮き出た犬達の姿がまだ目に浮かぶ。過ぎ去った年月からいって、私が現地で見ていたあの犬達の一生はすにて終わっているだろう。しかし、彼等の子供や孫の世代なら、あの世界にまだ生きていてもおかしくない。

この数年、ロシア社会は大きく変わった。経済は石油や天然ガスの採掘で飛躍的に発展し、プーチン大統領の出現で、国家体制も大いに改善されたと聞いている。

そんな中で、あの貧しく哀れに見えた犬達の子孫は、今どうして暮しているのか。私は日本に居ながら、そのことを繰り返し考える。

極東ロシアの街角で　その二　モスクワに出掛けた野良犬

一九九四年、私が最初に出掛けた当時、極東ロシアはペレストロイカの後遺症に悩み苦しむ時代を迎えていた。物資の極端な不足、行政機関すべての機能停止。公務員給与の長引く遅滞遅延。教師や市役所職員のストライキと街頭デモ。その中でも新制ロシアのスタート時点で特に気になったことが三つある。

第一に、七十年余りつづいた旧ソ連時代、国民はすべて平等をモットーにあの広大なロシア国内全土に例の四階建てアパートが造られた。その一つのアパートの内部に入ると水洗トイレと同時に、温水暖房のシステムが隅々に行き渡っているのが分かる。しかし、極端な物資不足は暖房システムを動かす唯一の

燃料、石炭に及んでいた。またその石炭不足の問題は、火力発電システムにも決定的ダメージを与える。すると、市民生活はどうなるか。

一日二四時間、その内各家庭に通される電気も暖房も夜の八時から十一時までの三時間に限られる。しかし極北に近いカムチャッカの夜は五月や六月でもまだ寒い。それに、わずか夜の三時間で一日分の調理が出来たにしても、それを三回に分けて食べるのだからたまらない。

第二に、国家の破綻で最も市民生活を危機に追い込むのは警察組織と銀行業務の混乱が挙げられる。国家からまともな給料を貰えない警察官はロシアマフィアとすぐ手を組む。そして銀行の玄関口に警察官とマフィアの一員が立ち塞がり、一般庶民の出入りに深く介入して来る。

例えば私の場合、ロシア人の友人の奥さんの助けを借りて銀行に出掛けたことがある。すると腰にピストルを下げた警察官が入口を塞いでこう言った。

「お前は何をしに来た？」

「手持ちのルーブルが無くなったので、日本円をルーブルに替えるつもりでここに来たんだ。」

「じゃ、無駄だったな。この銀行にはルーブルなんかない。どこか他の所へ行け。」

その言葉に私は一瞬唖然とした。腹も立った。それでも仕方なく、隣に並ぶロシア人の奥さんの顔を見た。すると彼女は表情を敢えて消したまま私の腕を引き、

「じゃ、別の所へ行きましょう。」

といいながら、どんどん銀行を離れようとする。

ところがその時、例の警官の脇から飛び出してきた男が私に囁いた。

「お客さん、あの銀行よりいいレートで日本円をルーブルに替えましょう。さ

あ、幾ら交換しますか？」

結局、私はその男の誘いに乗って円をルーブルに替えた訳だが、その時の交換レートは確かに、公定レートより遥かによかったのを覚えている。

しかし、銀行の建物を背にして戻りながら、私は現職の警察官とマフィアが日中堂々と手を組むロシア社会の恐ろしさを改めて感ぜずにはいられなかった。

最後に、物資の極端に不足した当時のロシアで困惑したのは航空燃料の問題だった。その極端な例に私はトドの現地調査を行った無人島からの帰る途中で遭遇している。

私の調査地は無人島のメドニーだったが、そのすぐ隣にベーリング島があり、その島唯一の街ニコルスカヤからは、カムチャッカ半島の中心部に毎日一便、直行便がある筈だった。

調査を終えて無人島からニコルスカヤに戻った夜、私は現地の係官に帰りの便について問い合わせた。すると、相手と私の間で奇妙奇天烈な話になった。

「済みません、明日の飛行機に乗れますか？」

「いや、それは分かりません。ここ一ヶ月、まだ一便も飛んで来ませんから。」

「何故ですか。どこで誰に聞くと分かりますか？」

「さあ、どうにもならないと思いますよ。ただひよっとしたら、明日突然カムチャッカから飛んでくるかもしれませんよ。空港に並んでみたらどうですか、・・・・・・。」

「並ぶってどういうことですか。予約券は買えないのですか？」

「今のロシアでは飛行機の予約券なんかありませんよ。飛行場に明日行けば分かりますが、この一ヶ月、毎日欠かさず飛行便のキャンセルが決定する時刻まで朝から待ちつづけている人が二、三十人は居る筈ですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・！」

その一週間後、私はともかくカムチャッカに戻ることが出来た。
時期は七月の後半、カムチャッカに短い夏が訪れていた。その快適な季節に誘われ、私は再び街に出掛けた。そしてある一つのバザールを物色していたとき、一人の若い研究者に出合った。
「やあ、お元気でメドニーからお帰りでしたか。」
「はあ、なんとかかんとか戻ることが出来ました。」
「それはラッキーでしたね。昨年などは、モスクワから来た動物学の教授夫妻があの島に予定より一ヶ月余計に残されましてね。奥さんなんか泣いていましたよ。」
「えっ、そんなこともあるんですか？」
「勿論、そうです。ところで、これからロシアもサマーバカンスの時期に入りますので、私も家族連れで黒海に出掛けます。モスクワ経由ですがね。」
「やあ、この時節それは凄いですね。それなら時間を持て余していますから、明日飛行場まで見送りに行きましょう。」
「そんなことをしてもらうべきかどうか分かりませんが、飛行場でお会い出来れば、私の家族を紹介します。それじゃ、・・・・・。」
その翌日、約束通り私は国内線専用の飛行場に出掛けた。そして出会うとすぐ、彼は私に奥さんと小学生の子供二人を紹介してくれた。ところが、その子供の一人の手に握られた手綱と、その先に大人しく繋がっている犬を見て私は本当に驚いた。それはまさに、私がいつもバザールで出会う野良犬の一頭だった。
「あの、その犬は、・・・・・？」
「ああ、これですか。実は一ヶ月前から我家のアパートに居る犬でしてね、二人の子供が揃って今回のバカンス連れて行くといってきかないものですから、

ともかく飛行機の座席の間にでも座らせて行きます。」

「そうですか、・・・・・!」

定刻を遥かに過ぎたその日の夕方、彼等一家とあの野良犬が大人しく一緒にタラップを登って行った。

あとがきに代えて　その一　枚方野犬裁判

昭和五八年、大阪府の枚方市郊外で野犬が次々と人間の子供を襲う事件が発生した。最初は軽症、次が重症、そして最後に死亡事件が起こったのだ。

京都と大阪の中間、淀川を挟んだ地域に枚方市がある。古くから淀川を使った水上交通の要ともいわれ、歴史の中にも繰り返し現れる街、それが枚方である。

枚方はまた、東の外れに聳える生駒山系を挟んで、京都府と奈良県と大阪府が接する街ともいえるが、生駒山系に踏み込むと同時に、県も府も関係のない山岳地帯がその先に連なる。

そんな枚方の東部には、至る所に小規模な新興住宅地が点在する。この事件はその一つの新興住宅地を舞台にして起こった。

昭和五八年、ある日小学生の男の子が野良犬に咬まれ、軽症を負った。その時点で付近の住民が野良犬の小規模な集団を確認、大阪府の担当保健所に対して緊急の駆除対策を求めたが、結果として大阪府は効果的対応をしていない。

その一週間後、野良犬による第二の事件が発生。再び近くの小学生が上半身を咬まれて重症を負う。ただし、つづいて起きた野良犬事件では四歳の女の子が集団で狙われ、死に至るという悲惨な問題へと発展している。

その年の終り近く、四歳の娘を失った両親が原告となり、大阪府知事を被告

とする最初の裁判が始まった。場所は大阪市内の中心部にある大阪地方裁判所。しかもその裁判が長引き、五年数ヶ月を要して判決が出た。結果は大阪府の敗訴で、千数百万円の慰謝料支払いが、裁判所から大阪府知事に命じられた。

その一次裁判が終わった直後、大阪府知事の代理人として主任弁護士が遥々北海道大学の研究室を訪れ、私に次のような要請を行ってきた。

一、　組織的実態調査の実施

二、　実態調査結果を前提とした科学的な真相究明

三、　専門家として大阪高等裁判所の証人喚問に応ずること

わざわざ大阪から北海道に住む私にこうした要請が行われた背景には伏線がある。その一つは、私への要請に先立ち、大阪大学と京都大学の関係者から推薦があったこと。もう一つは、この事件に先立つ五年前、私がアニマという月刊雑誌の依頼に応じて、何故人間は犬に咬まれるか、という短い評論を寄稿していたことである。

それはともかく、私は当時、心臓を患ったばかりだったが、この要請を承諾した。

大阪府の依頼に応じて私が手掛けた最初の仕事は、死亡事件発生現場一帯の野良犬生息調査。助手や学生を引き連れ、調査現場に初めて足を踏み入れたのが平成元年のことだった。

この調査に関して依頼主となった大阪府は適切な担当者（K氏）を選び、あらゆる面の協力を惜しまなかった。彼は本来、獣医師であると同時に、役人にしてはとてもバランスの取れた人物だった。

だが、一旦調査を始めると同時に、驚くことが次々と明らかになった。まず

第一に、夕方早くから出没する浮浪犬もしくは野良犬の数の多さ。ある時期の調査で、その数は百五十頭を遥かに超えた。

次に、付近住民の犬の管理に係わる特殊な態度。ある住民は堂々と私に語った。

「この辺ではね、夜の八時といえば皆が皆、自分の家の犬を放すのさ。それが長い間の習慣だし、もし一晩中犬を庭に繋いで置いたら、いつ野犬に喰い殺されるか分からないからね。」

その言葉を裏付けるように、その辺一帯では夜の八時ころ、一斉に犬の騒ぐ声が辺りに響く。あれは夜間の開放を待ちかねる飼犬達の声に違いない。

また、ある住人がその時刻、自分の犬にこういうのを私は聞いた。

「小さい内は可哀想だから餌はやるけど、お前くらいの年になったら、自分の食い扶持は自分で探すんだぞ。」

この言葉を聞いたとき、私は自分の耳を疑った。

そして最後は、行政機関の行動原理。その具体例は二つ。暴走族を山間部まで追い掛けてきた警察官が県境の標識を見た途端、すごすごと引き返していく姿。もう一つは、野犬狩りを行う際、少なくとも当時は隣接する府県の間でまったく事前の打ち合わせも連携もないこと。言い換えれば、大阪府の野犬狩りで野良犬達が追われる場合、道路一つで管理機関の違う隣の府県にさえ逃げ込めば、後はなんの危険もなくなるということである。

それはさて置き、私達は個々の野良犬について終日追跡調査に入った。その結果、二つの点が注目された。

生駒山系では至る所で仔犬の出産と育児が道路脇で行われる。また、山間部に棲家をもつ野犬と野良犬の多くは日没以降、付近の新興住宅地に出掛けて餌を漁り、夜明けと共に新興住宅地から姿を消して山間部の棲家へ戻ってしまう

ことであった。

一年余りの現地調査を経て、私は大阪高裁に証人として二度出廷した。その際、私は原告被告、さらには裁判長の質問にまで幾つか答えた。それをまとめると、次のようになる。

一、　一審の大阪地裁での裁判では少女殺害の犯人がどの一頭であったかが、審理の中心になっている。しかし、殺害現場に複数の犬が集団をなしていた以上、犬という動物の性質から単独犯の割り出しそのものが、意味のない作業だったと断言出来る。

二、　昭和二十年代に由来する野犬や浮浪犬の取り締まりにおいては、厚生大臣から各都道府県知事に対して管理権限が委譲されているが、捕獲にしろ捕殺にしろ、犬の習性に関する十分な知識が厚生大臣から各知事に伝達されるべきであったのに、必要な実態調査もそれに基づく通知通達も厚生大臣（厚生省）は今日まで行っていない。

三、　野犬や野良犬を管理するには平時の継続的実態調査が欠かせない。しかし、それを実行するための予算や人員の点も、国および各府県知事は、予算編成において考慮した形跡がない。

四、　したがって、この事件に関する責任は保健所などの職員や現場管理者にあるのではなく、国と地方知事の双方にあると認定されるべきであり、国または県を中心とする継続的実態調査の実施が不可欠である。

結局、大阪高裁での裁判は私が二度目の証人台に立った翌日結審した。ただ、この訴訟や裁判に関連して、私は日本人の社会が犬という動物に対してどれほど無知無能であるか、ということを改めて感じている。と同時に、生々しく生きる動物とその集団をなんらかの理由で裁判官が裁く場合、日本の裁

判所がいかに重大な過誤過失に陥り易いか、ということに不安と恐怖すら覚える。

ちなみに、この枚方野犬裁判に関連して、事件後、無数の犬が現地一帯で捕殺されたことを一つの記録としてここに残して置きたい。あれは一体何のためだったのか。あの野犬狩りによって、行政当局は何を期待していたのか。

あの痛ましい事件発生から四半世紀、果たして我国の動物管理システムはどうなっているのだろうか。犬全体に対する人間社会の身勝手な姿勢や態度は改められているのだろうか。私の限られた情報の範囲からすると、その点は深く考えることすら恐ろしいように思われる。

結びの言葉

これまで私は多くの犬と出会い、そして別れきた。

ある者は飼犬として深く関わり、またある者とは観察や訓練の対象として付き合ってきた記憶がある。

しかし総じて見る限り、私も他の人々も、犬を利用できるだけ利用し、いざ邪魔になったり、不必要になった場合は相手の立場や感情に目もくれず、さっさと切り捨てて各自の生活を継続しているように思える。

私の場合、自分で飼った犬達からは動物の研究を進める上で多くの協力を与えられた他に、様々なことを学ばせてもらったと思っている。

他方、野良犬や野犬と呼ばれる犬達からは自分の人生にとって忘れることの出来ない貴重な教訓を受け取っているのも明らかである。

ところでよく考えてみると、飼犬にしろ野良犬にしろ、犬という動物のすべては我々人間の強権的な支配下において生まれ、かつ死を迎えていることに反論の余地はない。それはまた、盲導犬からセラピー犬、さらには災害救助犬に至る特別な犬達についても、その法則は一向に変わらない。

では一体、我々人間とは何者なのだろうか。どこから誰に我々はそのような特権を与えられたのだろうか。私はそのことを考えずにいられない。

願わくは多くの犬に対して私がこれまで犯した罪の一部をこの本の内容において許して欲しい。しかしそれすらも、犬達はこういうだろうか。

「馬鹿が、それこそお前の勝手だろう。」

二〇〇九年二月十日　　著者

用語の仮定義について

一　野良犬　飼主を持たず、多くの人間に媚へつらいながら市街地を浮浪する犬

二　野　犬　飼主を持たず、常に人間社会に対して対決姿勢を崩さない犬

三　山　犬　右に同じ。ただし、その生活圏は人間の住居のない森林や山林に限られる。